



寂しい解体



新保 章

コンテンツ

(コンテンツ)

- 寂しい解体
- 仮面
- 鉄格子
- とある日
- 都会
- 安酒の朝
- ある日
- 人波に
- 都会の公園
- ある日
- 影
- 夕刻の街で
- 都会のノイズ
- 土方
- ある日
- 街で
- 器楽的な夜
- 夜の胃袋
- 吹き消される者
- 顔
- 冷たい夜に
- 冷たい夜に
- 病に
- 病

寂しい解体

寂しい 解体が始まる
いつの間にか とりとめのない
イメージを 頭が受信し
脳の中に移植される 他人の記憶が
僕の体の 命令系統になる

瞳に映る 映像は
色も音も ないものとして
無機質に 形を変える
ものうげな目の 万華鏡

いつの間にか 奴隷に奪われた
手と足とは 枷をはめられ
ばらばらに 幽閉される
自分の力では 動けなくなる胴体には
心臓の 動悸だけが
動物のたけりと 熱く脈打つ

舌は 消費されて行く言葉を
大量に生産し 街を雑音に埋め尽くす
こわれた 機械仕掛けの
玩具のような 無秩序さ
黙ることのない いらだたしさに

季節はめまぐるしく 香りなく移る
痛みなく 引き抜かれる魂は
一人寂しいところへ 投げ捨てられ
滑り落ちて行く
どこまでも続く 螺旋のトンネルを

終わることない 目眩に
重くなるまぶたは やがて
開けなくなる 無気力な気怠さ
朝の無い 暗い暗い夜に

○

爪を立てる その痛みで
落下を止めよ
ますます速さを増して 血の気を失う
魂を 繋ぎとめろ

仮面

血潮にのって 体をかけめぐるのは
邪な 僕の思い
汚れ果て 腐りかけて行く
魂のうめきには 耳を傾けもせず
顔の上に掲げる 仮面の上には
ゆがんだ 笑いを描き
騒々しさのなかで わからなくなって行く
これがほんとうの 自分なんだろう と

鉄格子

鉄格子の 小さな窓から
覗いてみる 外界は
光に 溢れているのに

囚人服に 身を包んだ僕は
ただ懺悔の涙を 流すばかりで
いつ終わるのかも わからない
刑期の終わりを 待っている

とある日

昨日 嵐に襲われた
ざわめきの森の 憂鬱な不安が
僕の心を 覆っていた

表情を持たない 群衆という
イメージの 暗い海の底から
浮かび上がって来ては
僕の首に くらいついてくる
奇妙な いくつもの顔
(欲望に 目を血走らせて)

僕が傷つき流す血に 集まってきては
なめつくそうとする 化け物たちの
笑う声が 耳に飛び
僕の魂は痩せこけた 青白い魚のように
背を弓なりに 溺れていた
そんな喧噪の中で 南国の花咲く
島の位置も 見定められずに

そんな日々の続きは 悪夢のようだ
うなだれる 僕の姿を
ああ明るい 陽の射す
野に 解き放ちたまえ

ネオンの明かりに 海草のように
ユラユラとする 人影や
海牛のように 街角を
はいつくばる 人間の
胸を悪くするような 感情のなかで

水平感覚を失い 目眩を感じている魂には
風の衣をまとわせて
朝日が立ち昇る 地平線へと
僕の生を 立ち向かわせたまえ

都会

都会の
正体のない生活は
僕の魂を暗くする

○

まるっきり
見えなくなるまでに
心を覆い隠して
寂しい顔をした都会が
ケラケラと顔の上で
せせら笑っている

○

都会では時間が
ぎこちなく人間を流れる
僕らを奇形の
化け物に変えてしまう

○

人々の間には
ガラスの壁がはられている

○

鏡に向かって
話しかけているようだ
人々といても

○

一方的に
がなり立てるテレビ
街の中に
しみついている雑音

○

知らない人々の間に
宙ぶらりんにされて
無表情な
視線を浴びている

○

悪い夢を
見ているんじゃないか
僕は

○

都会に住めば心色あせ
病を病と
感じなくなるまでに
やんでいる

○

心から離れた
空虚な言葉が
都会を覆って
薄暗い不信感を
幾層にも心に積んで行く

○

ほら
後ろから子供が
「お母さん、お母さん」と
あなたの手を求めて
呼んでいるじゃないか

○

顔がある
その向こうにも顔がある

○

昨日を過ぎて今日に来る
来てみたところで同じ
心を楽しませはしない
今日へ

○

灰色の街並みは
来る日も来る日も
変わり続ける
あわただしく
いらだたしげに

○

刺激物にしか
反応しなくなる
微生物のように

○

今朝の新聞
死者五名

○

何事にも
無関心でいられる
心だ

○

逃げ去る場所がないから
めまぐるしい感覚が
ふりかかってくる
ビルの谷間の片隅に
心が痛む日を
頭を抱えて一人
うずくまっている

○

どこからか紛れ込んだ
小さな蟻が
あわてふためいて
めくら滅法に
ホテルのロビーの
白い大理石の上を滑っている

○

あなたは逃げる
電話ボックスの棺桶

○

脳裏の奥から
ひどく寂しい風景を
ひきだしてきて
凍り付くような
憤りに震えている

○

夕暮れ
鉄筋コンクリートのビルに
空から切り取られる夕日
風景が血を流しているようだ

○

誇りに汚れた側面は
夕日に照らされ
電車がホームに入ってくる
疲れた人々を吐き出して

○

夜の街は
まるで花火のようだ

○

街の明かりに
目をやられてしまい
都会の真ん中で一人
暗闇の中を歩いている

○

目にうるさい
仮装行列の集団
素顔の方が
もっと醜いのに

○

眺めてみるのが
こわいんだ

○

自分の醜さに
心を重く疲れさせ
不機嫌な顔をした人間の列が
繋がれて歩く囚人のように
都会の風景を
殺風景に通って行く

安酒の朝

僕はまた 安酒の匂いの
二日酔いで 目を覚ます
頭の芯の鈍痛 内蔵の重さ
いつまでも続く 嘔吐感

でたらめな 毎日には
でたらめな気分が ふさわしい気がして
血管にいつでも アルコールを流し

疲れて生気のない 顔を鏡にながめて
にごった瞳に ギョツとしながらも
けれど人生 こんなものだと考えなおし

今日の夜の 酔いだけを楽しみに
また砂を 噛みしめるような苦々しい
けれどお気楽な
人生の 一日を始めるのです

ある日

僕のマンションから 見おろせる
小さな 売地の一画
草が生えたい放題の 鉄線で捕虜に捕られた
あれは母なる大地の あれ果てた姿
四角に切り売られる その顔は
呼吸もひどく 苦しげで
それを助ける すべもない僕は

高層ビルの 一部屋に
青空と大地の間で 宙に吊られて
通り過ぎるだけの 生を
生のまま飲み下して 消化不良
焼かれる体は コンクリートの墓の中
母の胸に死ぬことすらも ままならない

人波に

いつの間にか 人波がとぎれて
僕は 交差点に立ち止まる
追いすがる人の 後を失い
足を動かす わけを失って

僕を 待つわけもなく
信号は 無常な赤に色を変え
四方からは 僕がいることに
あらわな怒りの クラクション

冷たくなる瞳
距離をおいてしまえば
あずかり知らぬ 人の群れ

ビルに 埋め尽くされた
ちっぽけな 空は
ほこりっぽいものだらけで 泣き出しそうだ

さっきまでは 暖かだった
陽射しもよそよそしく
僕の肌を 嫌い始めたらしい

僕の目に 言葉とイメージを
ねじ込もうとする 広告が
もう僕の頭には
はっきりと わからないでいる

交差点を 渡りきらない僕を
みんなが おかしな顔で見ている
いがらっぽい喉から
吐き出すような小声で 悪口をかわす

僕は あの人波に
何を 求めていたのだろう
あの後について行けば
どこへ流れ着くと 思っていたのだろう

僕はいつから
歩くことを 強要されていた
手放すことのできない
脅迫観念のように

轢かれたくなければ
事故に 会いたくなければ
早くここを 渡りなさいと
告げる言葉は一体 誰の忠告

やがてきっと
立派な姿の 正義の番人が
僕の姿を 排除するため
やって 来るのだろう

都会の公園

わずかばかりの 緑に囲まれた
どこからか 集まって来て
都会の公園には
何の重なりあいもない人々が
ベンチの上に ちがう視線で
ビルの突き出た 空を眺めている

与えられた それぞれの
生の重さに 放心するように
消化しきれない 退屈な毎日の
答えを 探しあぐねる
それぞれの 思いを額に
今日も不機嫌な 朝に目覚めて
歩き始める

時には 凶器のような考えで
人々を 切り刻みながら
日に日に何か
痩せ細りゆく 体を引きずって
生活に 切り売りする
魂の断片を もはや
取り戻す すべをなくしかけて

幸運がとりこぼす 答えが
落っこちて いないものかと
下をむきながら またこうして
ひととき 溜息をつくために
この公園に 集まるのです

ある日

小鳥さえも ついばまない
つまらない考えに 日が暮れる
焦りさえもない どうしようもない心は
笑うでもなく 泣くでもなく
夕日模様に 手がつけられなくて
自分を持て余す 僕はまた
この公園のベンチに 足を投げ出し
やることもなく 頬づえをつくばかりです

影

空には夕日が 楕円にゆがみ
足下からは長く のびてゆく影が
地面に黒く 浮かび上がり
人々の背後に はりついて
足枷のように 離れないでいる

雑踏の中では 影は影に入り乱れて
人の形をなくした 奇妙な図形になる

手や足を 何本もはやし
ゆらゆらと 揺れる影は
寂しい昆虫の 触手のように
都会の地面を 舐めながらひろがり

それは都会の 黒い意志となって
人々の夢の中へと 流れ込んで行く
寝苦しい悪夢へと その顔を変えて

夕刻の街で

今日も僕は 蜃気楼のように不確かに 街を歩いていた
横断歩道で僕を切り裂き 通る人々に肉をはがされ
たくさんの声の波長と 騒音で混乱する頭痛のままに
肺に満たされた 排気ガスを体中にめぐらせながら
極楽鳥のように気楽な 色彩の人波に流されていた

夕刻 あなたと出会い 座るベンチにも
高層ビルの窓に 夕日が映るイルミネーションが
垂直の海の 波のように鋭利に
降りかかって来ては粉々に 僕を苦しくさせるから

—ねえ、僕の声は聞こえているかい
ちゃんとあなたに
あなたの瞳の僕は 夕日に燃え尽きていたらと
怖くなる 僕は目をそらし
あなたの髪に触れようとするのに
それは夢のように遠く 淡く
曼珠沙華の色になびいて 触れられない
赤い風に口をふさがれる 僕の唇は血に染められて
舌が空に霧散するように 言葉がなくなるから

僕は 輝き始める 一番星の光りに
頭から貫かれるように 寂しく あきらめて
物言えない操り人形の 首をうなだれる
記憶もあやふやに入り乱れて 收拾のつかないままに
大切なあなたを 不機嫌に つまらなくさせていた

都会のノイズ

ビルに吐血して 夕日は
神経のような 高速道路に
食い尽くされる その悲鳴が
鈍器の傷口のように 鼓膜の奥に
うずいている 切れることなく
落ち着かない 人波は
乾いた足音を立て 動き出す
色が変わる信号に 車のクラクションに
追い立てられるように
ゆらめく 青白いモーションの
顔の上に はりつけた
こわばった 仮面の下には
闇がくもの巣と からみつき
空虚な笑いが こだます頭痛に
追い討ちを かけるような
列車の急ブレーキ 軋む音
悲鳴を上げて ひき潰される
たくさんの思いを 忘れるために
逃げ込む 電話ボックスの
棺桶に眠る夜も 誰かが
呼び出す声に 眠れない
男女もわからず 耳元に
ささやいて終わらぬ 敵意のように
階段を降り 走るプラットフォーム
僕を乗せずに閉める電車が
けたたましく鳴く 出発の音
僕がへましたときに
あわれんでやれという 顔をした
笑い顔が通り過ぎて行く 脳裏を
工事続ける 金属的な機械音
宙へ宙へと 伸びて行こうと
脳細胞にも 打ちつける
くいの音に 飛び立とうと
へばりつく べっとりとした

人間のにおいに むせびなく
鳥を高く飛ばして 逃がしたい
切取られた 小さな窓の 青空への祈りにも
青ざめた顔の 疲れた人々の群れが
上目づかいで 重い足音に踏みつけて行く
夜のビルから 街を眺め
何も無い体を 喧騒が 暗い
高層街に乾いた つむじ風が寂しい
激しく うずまいて もだえ終わった 断末魔

土方

「工事中」
の看板の向こう側
赤い夕日に 背中を押されて
一人 地面を掘る土方

彼の服はすり切れて
体には 土がこびりついている
肌からは汗を 目からは大粒の涙を
ぼろりぼろりと こぼし
声もたてずに 泣いている

彼の持つ つるはしは
堅い意志で 鍛えられていて
太い腕の 振り下ろす力で
ダイヤモンドさえも 砕こうとする

仕事を終えて 会社から
ぞろぞろ出てくる 人々は
泥に汚れた そんな彼を嗤い
頭のいかれている 奴だと
役には立たない 奴だと
そうして 夜の街へと
生命をすり減らしに 消えてゆく

しかし彼は 知っているのだ。
そんな立派な人々に 蔑まされながらも
そこには掘るべきものが あることを
土の中深く 掘だされたがっているものが
埋もれていることを

いくつもの明かりが まだともるビルの
土台を築いてきたのは 彼だ
この街並みの 生活を支える
根っこを探してきたのは 彼だ

一人だけの 作業場に
土方が 地面を掘っている
手のひらを 豆だらけに
赤い夕日に押されて
土方が 地面を掘っている
血のような汗を したたらせながら

背広で着飾った 人々に嗤われようとも
しかし彼は 知っているのだ
そこには掘るべきものが あることを
土の中深く 掘だされたがっているものが
埋もれていることを

彼は その声を聞くのだ
そしてその声の主を
掘り当てることが 出来ない日には
人々の嗤いと 自分の無力さとに痛み
ああして時折
声もたてずに 大粒の涙を流すのだ

ある日

大きな夕日が 背中を押してくるから
もう帰ろう
きっと僕の心の 戻るべきところへ
寂しい思いが 知らず知らずのうちに
僕の足を はやくするから
激しい追憶にかられ 一人涙ぐみながら
建築を抜け 人間を抜け この体を抜けて
もう帰ろう もう帰ろう

街で

地上高く 地面からつき上がっている
構築物と構築物の狭間を ほこりっぽい風が吹き
僕は一人 オレンジ色の照明が照らす 道を歩いていた

さっきまでは誰かの 小さな肩をつかんでいた感触は
まだ手の中には 残っているけれど
それがどんな人だったかは 忘れてしまった
よく見かける顔だったけれど
もう僕は気にもとめずに 歩いてゆけば
高速道路が 宙を曲がりくねって走る

ラジオからは 彼女の声が聞こえたような気がして
ああ彼女は 僕の気持ちを重たい衣装にして
被せていた彼女は
その重さに疲れてどこかに 飛んでいってしまった
軽やかな足取りで ホテルの回転ドアをくるりくるりと
通り抜けて夜の中
笑っていた 口元の赤い口紅を僕は思い出す

透き通った ガラス越しの
テーブルに座っている 二人連れを見て
少しうすら寒さを 感じる頃
立ち止まる交差点で 僕は思う
ここは一体 何処なのだろうと

器楽的な夜

丸や三角の幾何学が
構築物に居座っている
通りの下
ユングの元型や
ギリシャの哲学が
手の上で錯綜する生命線を
見る易者の
予言する明日には
密売人たちが
魂の売り渡しをする街角に
夜を売る少女を 乗せていくエレベーターが
高速で昇って行くラッパの
鳴る時計の告げる時に
デパートのマネキンはまなこを
大画面の映す映像の中
移り変わる世界の情勢は
インド道具を売る外人の
売り言葉に変わる信号を
青いギターをならし
震える六本の弦は
張り上がる声のしわがれた
酔っぱらいからこだまする
ごきげんな笑いは
ネオンにはなやいで
都会の夜はたくさんの
くだをまき散らし

頭の中

ブリキの玩具の

でたらめなオーケストラの金属音に

器楽的に鳴り続ける

夜の胃袋

長い夜の胃袋を

歩いているようだ

やがて僕は消化される

吹き消される者

僕はただ吹き消されるだけ

いたずらに点り

身をとかしながら

ろうソクの明かりよりも暗く

ただ闇に飲まれる者として

顔

あなたの 肩の上には

青ざめた寂しげな顔が 途方に暮れて

小さく言葉を つぶやいているのに

あなたは出ていってしまう

その切なる声にも 聞く耳をもたず

心ざわめくままに

するりと身軽に ドアを開けて

人々が入り乱れる 都会の喧噪の中へと

心の切れ端に一瞬の 炎を点せるものを求めて

そうしてぐったりと 疲れて
あなたはまた 夜に帰ってくる
手渡された 頭一杯の騒音を連れ
二日酔いのような 頭痛を感じながら
一人暗闇に投げる目線は 定まらずに
何かイライラと 不機嫌になって

そんな時にまた 寂しげな顔が
あなたの肩には 浮かぶのに
あなたは しみだらけの包帯で
傷ついた心を 隠すのだ
何事もなかったのだと 傷の深さを見ないように

けれど治らない 傷の疼きには
つける薬を もとめるために
明日もまた 雑踏の中へと踊り歩く
やがて壊死する あなたの心に
力をなくした 寂しげな顔は
蠟燭のように ゆらめいて消えて

あなたは本当に あなたを失ってしまい
都会の海の底に 潮にゆられる海草のように
寂しく根拠なく 暮らすばかりで

冷たい夜に

あなたへとつながる 水脈をなくして
行どころのない心は 大理石のように冷たく
胸の内深く 沈んでゆく
光りなきところ 暗い海底の水圧の下へ

プランクトンの死骸
マリンスノーの 白さだけが
僕をほのかに 照らしだし
奇妙な肢体の 深海魚が
闇から上がってきては 僕を脅かす

紺色の 冷たいところ
この息苦しさに僕はどこまで
耐えてゆくことが できるだろう
震える弦の音で 僕を
呼び起こしてくれる人は もういない
夜ごとに風をはらむ カーテンから忍び込むのは
幻想を伴う 闇ばかり

やるせなき 夜のテーブルに一人
アルコールを垂らし 酔いにまかせて眠る

夜の上には 干からびた月が降りてきて
フィルムの 早送りのような夢を見させる

渴いてしょうがない喉の いやせない渴き
目に映っていた 空の穏やかさは
忘れるべき かすかな印象として
悲しまないように 無感覚になる
麻酔をうつ 目に映るものが
ただ網膜に 過ぎて行く
僕を取り込まない 映像として

僕は時折 奇妙に唇をゆがませる
笑顔を 浮かべて
小さな存在感を 示しているだけで

冷たい夜に

一

僕は不安な存在を
ぶら下げて 歩いている
街角 異人たちの黄砂にまみれて
不吉な 萎びた 青く膨らむ

暗い闇夜の階段を
いつまでも 歩いて行くような
一体何処に 明かりが見えるだろう
すすり泣く声が 冷たい森からやってくる

疲れている 冷たい手の上で
額を休めるとき
ガラス細工のように 闇夜は窪んで
僕はその中にそっと 顔をはめこんでみる
そのままに凍り付きそうな 僕の終焉を

じっと見ている 幾千もの瞳のような星と
静かな海のような 青白い月の光

狂気という言葉が くるおしくもだえる夜に
遠ざかる一日がまた 足音もなく暗い街灯の下

もうあなたの家の庭には 赤いバラの花が
咲いているだろうか

二

聞いている 僕の耳が
聞こえなくなる やがて
遠い森のせせらぎ
あなたと夜に うちならず鼓動

見ている 僕の目が
見えなくなる やがて
野に咲く 黄色のひまわり
青い水辺の 波打ち際

映像のように 毎日僕を通り過ぎてゆく
いつでも笑ってられる
ひきょうな顔が 僕の神経をひきちぎってゆく

電話の中から 飛び込んでくる声が
僕を眠りから 目覚めさせ
鼓動にいつまでも 鳴り響いている

僕はやがて 死んでゆくだろう
立ちくされた 体を引きずって
体を維持するための 食物を
機械的に 口の中に納めて

聞こえなくなる やがて
汗くさい 獣の体に移り住んで

三

僕はとってかわられる 誰か見ず知らずの人に
あなたと供に歩くのは 僕でなくても良い
夜な夜なあなたに 愛の言葉を囁けるならば

僕は故郷に帰れない 誰もが僕を忘れてしまった
だから仕方なしに
仮面をつけて 街をさまよい歩くのだ
干し草の匂いのような どこか懐かしい風は
時々 吹いては巡るけど

僕の耳に聞こえる潮騒 遠くに浮かぶ水平線
あれはしかし ほんとうに僕の記憶だったのか

はりつめた空に 耐え切れぬように
落ちてくる枯葉
くるくるとまわる表裏の 偶然の産物のように
僕は止まり 残るすべを知らない

病に

長い病に 病んだ心を抱えながら
疲れている体を休める
見慣れたこの部屋の
時計はもう 止まっている

針がゆがんで 重苦しい時間が
僕の心を 押しつぶそうとする
ドアはかたく 閉ざされてしまい
僕は 鍵をなくしてしまった

白い壁には 黄ばんだ汚れが広がってゆき
壊れた窓枠からは
冷たい風が 漏れ込んできて寒く

紫の唇を かみしめながら
つかない蝋燭をつけようと 必死になる僕は
指先を 凍らせてしまう

窓からながめる 風景は
煙突や看板が 奇妙に突き出した
ガスに淀んだ 街の光景だ

工場地帯が入り組んだ ピカピカとネオンが光る
雑音のしみこんだ その中では
目を剥きだしにした 化け物たちが
奇声を発しながら
爪を立てて 血を流しあっているのが見えて

ああもう僕は 嫌なのだ
この部屋で おののきながら
砂を口に含み 嘔み潰すように
苦々しく黙ったまま 毎日を過ごすのは

うらみがましい目をして 僕の脳裏に
僕を窒息させようと
黒装束をまとう 陰惨な日々たちを
これ以上に 過去の葬列に迎えるのは

この部屋から 出してくれ
僕の心が 腐った異臭を発する
化け物に 変わってしまう前に

病

母よ 僕は病んでいる
重たい自分の存在に 押つぶされながら
青白く光り発酵し 伸びたり縮んだり
時々には 血を吐きながら
闇夜に青い三ヶ月に 狂人の祈りを捧げている

脈打つ心臓の 赤い血を見つめる
黒猫の目の水晶体は どんな未来を映し出す
黒い薔薇咲く不吉な夜には
髪を引っぱりながら その痛みで目覚めている
僕の足枷は まだ肉に食い込んでいるか
僕の拳は まだ殴ったら痛いか
悲鳴を上げようにも
もう舌が 無くなってしまった
冗長なお喋りで 使い減らしてしまったから

時計を止めてくれ
逃げ回る生を 追い立てる時計を
耳元で脅迫する 時計を
僕は壊したい 粉々になるまで
僕を流れる潮流の 魚のように大きく
呼吸をするために

奇妙に張り付く ゴムのような
この顔を はぎとりたい
おかしくなくても笑える 不可思議なマスク
魂の震えを伝えない瞳の
どこか間抜けた 道化師に
たくさんの顔が かみついて嗤う

血を流しながら 青ざめてゆく貧血に
めまいでゆがむ暗闇
僕は視界を失って 天も地も分からずになりながら
宙ぶらりんに 生きる日々の
病に 倒れこみそうになりながら

けれど汗ばむ 夢のなかには
いつでも癒しの日の姿を
探しあぐねて 泣きそうです